

# 小学校教員養成課程の家庭科教育における 模擬授業の実践と学習効果

## The Practice and Learning Effects of Mock Teaching in Home Economics Education for Elementary School Teacher Training Course

山口 香織

### 要旨

本研究は、小学校教員養成課程の2年生を対象に質問紙調査を実施し、「教科教育法・家庭」の模擬授業での学びについて検討を行った。その結果、学生の模擬授業への満足度は高く、模擬授業後は授業設計における自己課題が明確になっていることがわかった。一方、効果的な学びが確認できなかった項目は、学習指導要領の内容理解や指導案作成であった。また、小学校における授業参観経験や模擬授業での教師役経験など、学生自身の経験によって模擬授業の学びに違いがあることも確認された。

キーワード：教員養成課程 小学校家庭科 模擬授業 学びの特性

### 1. はじめに

小学校教員養成課程における教科教育は、「教科に関する科目」と「教職に関する科目」で構成されている。現在の課程では、教科の指導法について学ぶ「教職に関する科目」はすべての教科で必修科目となっているが、「教科に関する科目」の履修要件は8単位であり、小学校9教科（国語・算数・理科・社会・体育・音楽・図画工作・家庭科・生活科）から4教科選択履修のみで免許に必要な単位を満たすことになる。本学の小学校教員希望学生の多くは、小学校教員免許と同時に幼稚園教員免許の取得も目指しており、「教科に関する科目」の履修において、幼稚園教員の免許に含まれる教科（国語・音楽・図画工作・生活）を選択する傾向が強い。したがって、小学校家庭科の各領域内容について学ぶ教科専門の「家庭」を履修せず、必修の「教科教育法・家庭」のみで家庭科教育の学びを終え、教壇に立つ教員が増えてきている。このような背景もあり、教育現場では、家庭科の指導に対して苦手意識を持つ教員も少なくない。家庭科教育を教える者の立場からいえば、教科専門の「家庭」についても必修化し、理論と実践を踏まえた学びを着実に積み重ねることで今日の学校教育で求められる「実践的指導力」が身につくと思われる。しかし、履修に関するキャップ制の導入やボランティア活動、スクールサポーターといった課外の学びを推奨している状況では、これ以上必修科目を増やすことは望ましくない。この現状の対する解決策としては、「教科教育法・家庭」の授業の中で、「家庭」の内容を扱うことが求められるが、限られた時間の中で2つの科目内容を効率よく組み込む授業を行うことは非常に難しい。とは言うものの、新たな一手を考えなければいけないことも確かである。まずは、現在の「教科教育法・家庭」での学生の学びについて把握し、そこから授業内容の見直しと授業改善を図ることが不可欠だと考える。

先にも述べたように「教科教育法・家庭」は、家庭科の指導法を学ぶ科目として位置付けられており、授業内容には、学生が主体的・実践的に学ぶ模擬授業がある。そこで、本研究では、「教科教育法・家庭」における模擬授業を通して、学生の学びの特徴を明らかにする。

## 2. 「教科教育法・家庭」の授業の概要

「教科教育法・家庭」は、教育職員免許法施行規則に定められた小学校教諭一種免許取得科目として「教職課程及び指導法に関する科目」の「各教科の指導法」として位置付けられている。本学では2年生の秋学期に履修する。また、これに先立つ科目としては、教科の理念や専門知識と応用力を身につける「家庭」が2年生の春学期に配当されている。

本学では「教科教育法・家庭」を2クラス（1クラス50～60名）で展開している。授業内容は、小学校家庭科の授業設計について理論と実践から学ぶことをねらいとしている。具体的には、1. 家庭科の学習指導案を作成し、子どもの主体的な学びを促す授業展開を提案する。2. 模擬授業を通して、教材作成やその教材の意義、指導方法について探求するである。また、到達目標は、1. 小学校家庭科の目標や内容、育成したい力について理解する。2. 小学校家庭科の学びの特徴や評価のあり方を理解する。3. 家庭科の指導計画（学習指導案）を作成し、具体的な授業展開を提案することができる。4. 小学生の生活課題を含んだ教材や指導の工夫ができるである。

授業の流れについては、表1に2017年度の「教科教育法・家庭」のシラバスを示す。

表1 2017年度「教科教育法・家庭」シラバス

授業計画	予習
1 小学校家庭科教育の意義と目標	・学習指導要領の熟読 360分
2 小学校家庭科の内容と指導方法	
3 家庭科の授業設計	課題レポート
4 家庭科の評価	・子どもの生活課題 180分
5 指導案作成について	・指導案転記 180分
6 小学校家庭科の授業－ビデオ視聴から学びの特徴を捉える	・指導案（時案）作成 180分
7 授業設計(1) 指導案作成①個人（情報機器及び教材の活用を含む）	・指導案作成 360分
8 授業設計(2) 指導案作成②グループ（情報機器及び教材の活用を含む）	・グループレポート作成 540分
9 授業設計(3) 教材作成（模擬授業の構想と振り返り）	
10 模擬授業(1) 家族・家庭生活（情報機器及び教材の活用を含む）	授業設計
11 模擬授業(2) 食生活（情報機器及び教材の活用を含む）	・教材研究 180分
12 模擬授業(3) 衣生活（情報機器及び教材の活用を含む）	・教材作成 360分
13 模擬授業(4) 消費生活・環境（情報機器及び教材の活用を含む）	
14 模擬授業の振り返り	復習
15 まとめと確認テスト（より充実した指導のために）	・模擬授業後のまとめ 360分

授業は、講義形式と演習形式（模擬授業及び振り返り）で構成されている。前半（第1回～第6回）は家庭科教育の理念や意義、小学校学習指導要領（家庭科）の目的や内容、授業設計の基本事項について講義形式の授業を行う。後半（第7回～14回）は、模擬授業のグループワークや振り返りなどを演習形式で行う。

### 3. 模擬授業について

模擬授業は、1クラスを8班（1班6～8人で構成）に分け、グループで取り組んだ。また、学習内容の重なりを防ぐため、各班には予め内容領域（「家庭生活・家族」「食生活」「住生活」「衣生活」「消費生活・環境」）を設定した。指導案は、個人が作成したものを持ち寄り、グループ内で討議したうえで1時間（45分）の学習指導案を作成した。指導案には、指導者、日時、学年、題材名、題材設定の理由、題材の目標（観点別評価を含む）、指導計画、本時の目標、本時の展開、板書計画を記述した。また、授業で使う教材の準備や発問計画、教材研究も班で協力して行った。模擬授業は一回の授業時間を30分（1時間あたり模擬授業を2回実施）とし、学習活動の一部を省略した形で「導入」・「展開」・「まとめ」の流れはそのまま行った。教師役は班の中から1名が担当し、他の学生は、観察者と子ども役に分かれて模擬授業に参加した。模擬授業終了後は、教師役の学生が直ちに自己評価を行うとともに、口頭による他者評価のフィードバックが行われた。さらに、それぞれの授業を受けて特に「よかった点」と「改善が必要な点」を評価シートに記述し授業評価を行った。

### 4. 研究方法

#### 4.1. 調査対象と調査内容

兵庫県内にある私立女子大学の小学校教員養成課程で「教科教育法・家庭」を履修した2年生女子96名を対象に質問紙調査を実施した。調査時期は、2018年2月（最終講義日）で、調査内容は、模擬授業の学習に関するアンケートである。質問項目は、①学生の小学校での授業参観経験、②模擬授業での教師役経験、③模擬授業についての自己評価（7項目）、④授業設計での自己課題、⑤模擬授業を通して難しいと感じた点（14項目）、⑦小学校家庭科の授業づくりで大切だと思うこと、⑧模擬授業での一番の学びとは、⑨小学校家庭科で子どもたちに付けたい力とは、⑩どのような指導が大切だと思うかの10項目とした。設問③と⑤については、「1 とてもそう思う」～「4 あまり思わない」、「1 難しかった」～「4 易しい」の4件法で回答を求めた。設問④は、13の選択肢から当てはまるものを3つ選ぶよう求めた。また、設問⑦～⑩は自由記述での回答を求めた。

#### 4.2. 分析方法

質問紙調査から得られた数量的データは統計処理をした。また、模擬授業の学習では、学生自身の経験が学びに影響すると考え、小学校での授業参観経験と模擬授業での教師役経験を独立変数としてクロス集計を行った。なお、本稿では、アンケートの設問①～⑥について分析した結果を報告する。

### 5. 結果及び考察

#### 5.1. 小学校での授業参観経験と課外活動の現状

学生の小学校における授業参観経験について尋ねた結果を表2に示す。実際に授業を見たことがあると答えた学生は約65%（62人）で、半数以上の学生が小学校で実際に授業を見学したり、児童の学習支援にかかわった経験のあることがわかった。また、家庭科の授業参観につい

表2 小学校の授業参観の経験

	家庭科	その他	合 計
授業参観あり	12人(12.5%)	50人(52.1%)	62人(64.6%)
授業参観なし			34人(35.4%)

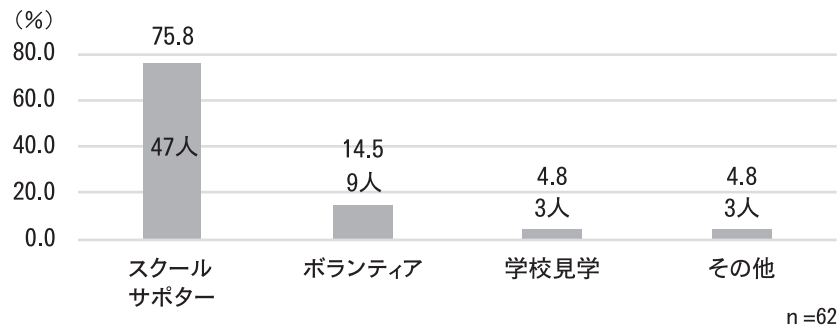


図1 小学校での活動目的

では、12.5%の学生しか経験していないことも明らかとなった。小学校での活動目的では、スクールサポーターが最も多く75.8%（47人）、次いでボランティアが14.5%（9人）、学校見学4.8%（3人）、その他4.8%（3人）であった。その他はいずれも年下きょうだいの授業参観の見学であった。

教科教育法の授業は、2年生の秋学期の履修である。教科の指導法を学ぶうえで、学生自身が予め小学校の授業や子どもの発達過程等を知っておくことは大切であり、教育現場での実体験が模擬授業を考えるヒントとなることがある。本学では、実践的な学びを重視しており、入学時からスクールサポーターやボランティア活動への積極的な参加を促している。しかし、実際に活動している学生は、全体の3分の2程度であった。教職課程での教科指導を充実させるためには、早い段階で小学校での観察実習を実施し、全ての学生が実際の授業の様子や子どもとのかかわり方をイメージできることが重要と考える。初年次教育に短い観察実習を含むなど、カリキュラムについても見直していく必要があるだろう。

## 5.2. 模擬授業の方法

「教科教育法・家庭」は2年生が履修する科目であり、学生にとって初めて模擬授業を経験する。そのため、指導内容としては、指導案の書き方や評価の仕方、学習内容や学習方法、教材・教具の扱い、教材作成、教材研究など、丁寧に説明し理解を促すことが求められる。しかし、それらに時間を費やしては、模擬授業に充てる時間を確保できないことから、授業では授業設計のポイントのみを教授し、実際の考え方や方法については、学生が模擬授業の取り組みから学ぶこととした。また、模擬授業をグループで行ったことについては、一つの課題に向かって仲間同士が協力して取り組むことで、個人では気づかなかった点に気づいたり、互いに教え学びあう中で知識理解の補完が期待できると考えたからである。この目標は概ね達成したと思われる。その一方、実際に模擬授業で教師役を経験した学生は全体の約1割となり、模擬授業時の教師役の設定については、課題があることがわかった（図2）。ほとんどの学生が

教師役を経験しない状況では、学習へのモチベーションや授業の参加意識にマイナスの影響を及ぼすことが考えられる。また、実際の授業を任される教師役の学生にとっては、負担感や責任感が大きいことも推察される。模擬授業の方法については、先行研究（伊波，1990；白石，2013；野崎，2012；高木，2007）や実践報告（伊深，2018）を参考に、受講人数や対象学年、時間、教科特性を踏まえ、効果的な実施方法を再度検討する必要があるだろう。

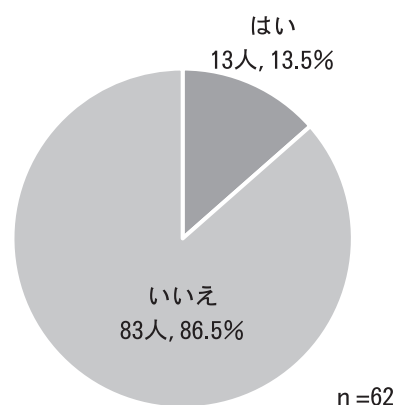


図2 模擬授業における教師役の割合

### 5.3. 模擬授業後の自己評価

模擬授業の学習に関する自己評価を図3に示す。「とてもそう思う」「そう思う」の割合が高かった項目は、「模擬授業をしてよかった」98.9%、「自分自身の課題を見つけ改善しようと思った」94.7%、「指導案・教材研究に積極的に参加できた」92.7%、「課題解決に向けて話し合うことができた」90.6%であった。反対に、「とてもそう思う」の割合が低かった項目は、「指導要領の学習内容が理解できた」14.6%、「細案の書き方が理解できた」14.9%、「指導案の書き方が理解できた」24.2%であった。以上の結果から、模擬授業は学生の授業満足度が高く、課題解決に向けて積極的な議論を可能にする授業であることが示唆された。また、模擬授業後は授業設計における自己課題が明確となっていることもわかった。一方、模擬授業を中心とした授業内容では、学習指導要領の内容理解や細案の書き方等、知識や理論への理解が十分ではないことも明らかになった。

自己課題について、実習までにできるようになりたいと考えている項目では、指導作成が

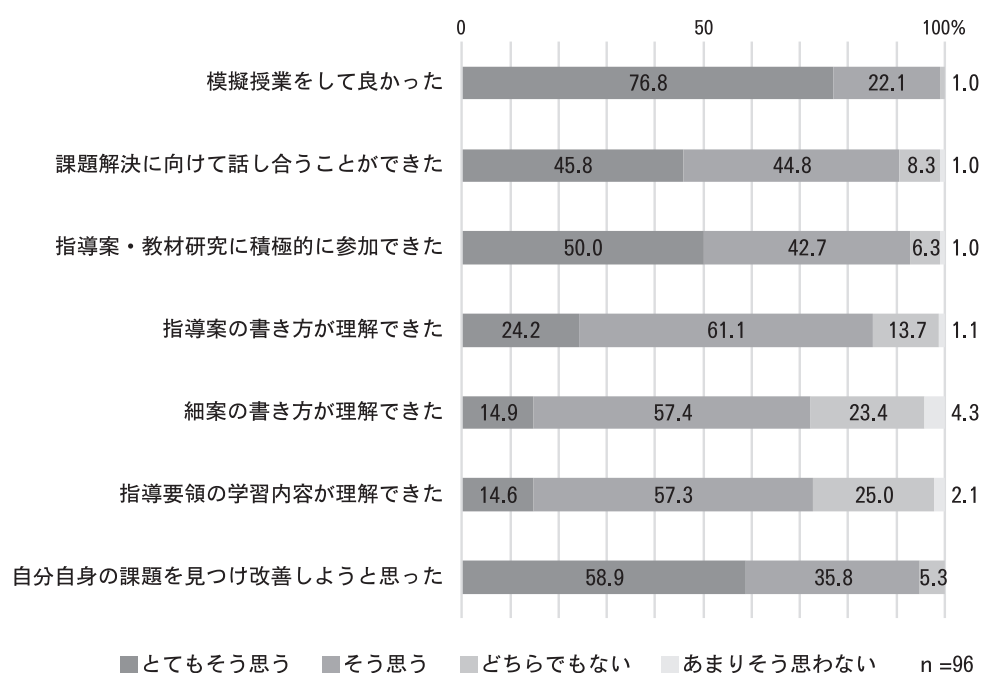


図3 模擬授業の自己評価1（模擬授業の学習について）



57.3%と最も多く、次に、児童の反応に対する臨機応変な対応が38.5%という結果であった(図4)。さらに、模擬授業の中で難しいと感じた項目では、指導案作成が最も多く69.5%、続いて指導計画が57.9%で、授業の展開(授業の流れ)についても56.8%の学生が難しさを感じていることがわかった。今後は、学習指導案の作成や指導計画について、学生の学習状況を把握し、個別の支援なども検討したい。

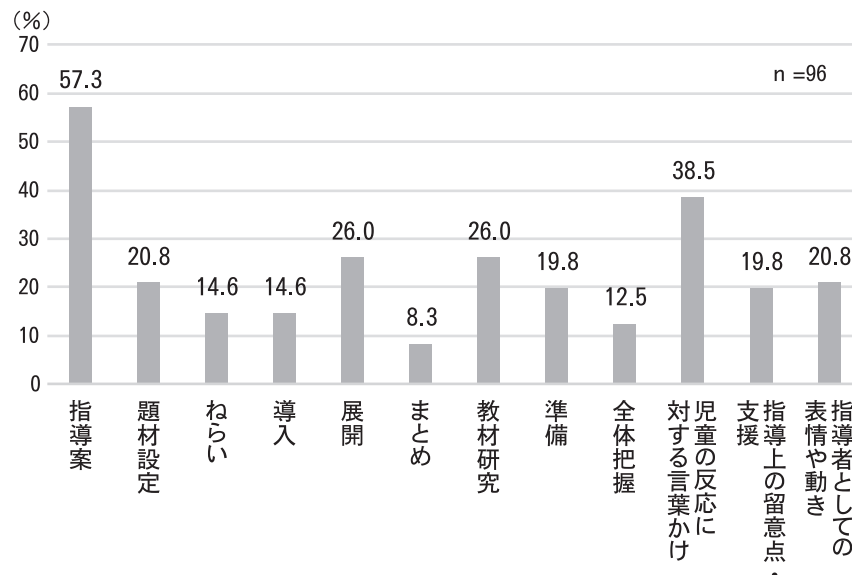


図4 授業設計の自己課題の内容(実習までに改善したい項目)

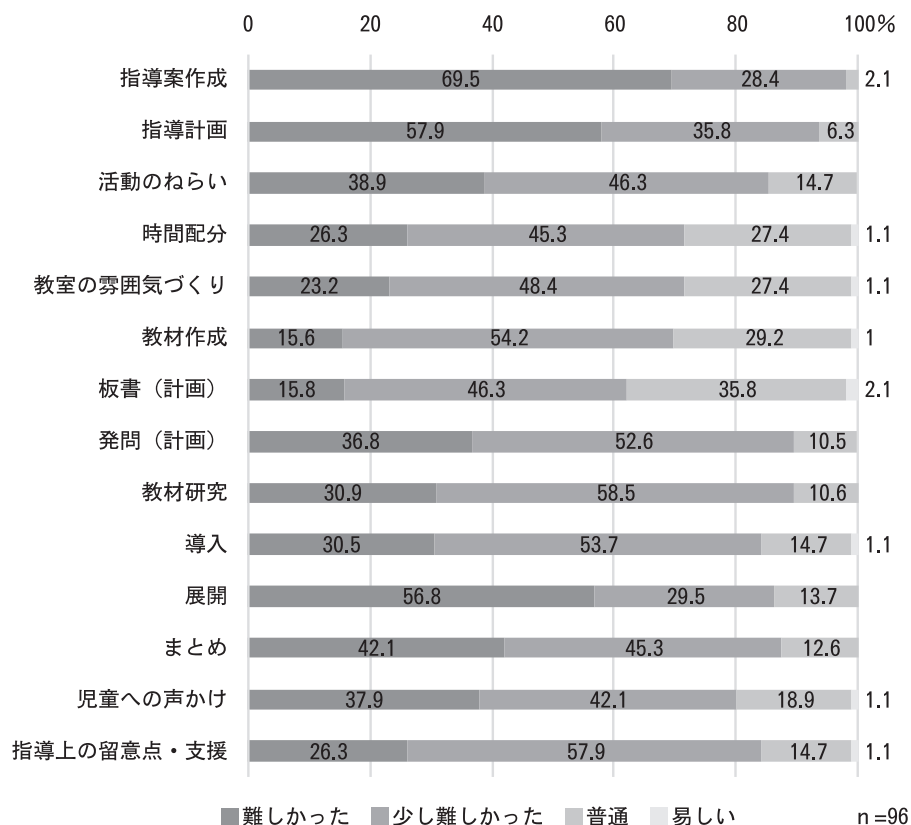


図5 模擬授業での自己評価2(模擬授業を通して難しいと感じた項目)

#### 5.4. 経験の違いによる学びの特徴

学生自身の経験の違いが模擬授業の学びにどう影響するかを検討した。図6は、実際に小学校で授業参観をしたことのある学生と授業参観経験のない学生の模擬授業後の自己評価に有意差が認められた項目である。また、図7と図8は、模擬授業で教師役を経験した学生と教師役の経験をしなかった学生とで学びに有意差があった項目である。この結果から、授業参観経験のある学生は、授業参観経験のない学生よりも教材作成に対する難しさを強く感じていることがわかった。また、教師役を経験した学生の方が教師役を経験しなかった学生よりも、自己課題を見つけ改善しようと思う意識が強く、模擬授業での教材作成への困難感も低いことが示唆された。以上のことから、授業参観経験の有無と教師役経験の有無が、模擬授業の教材作成に

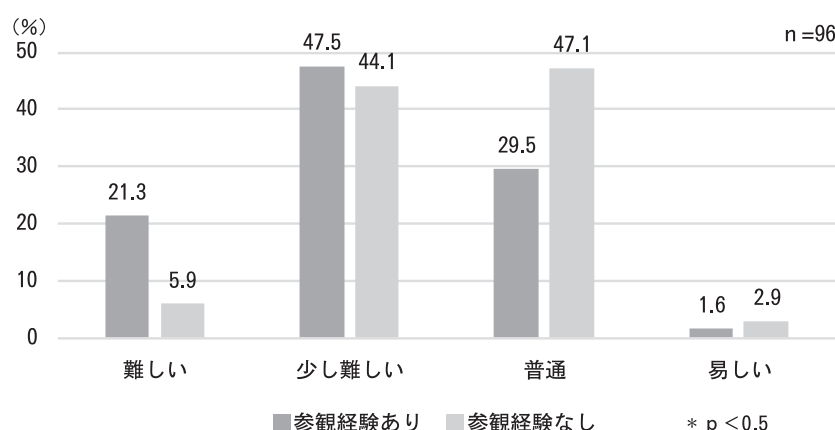


図6 授業参観経験による学びの違い（教材作成）

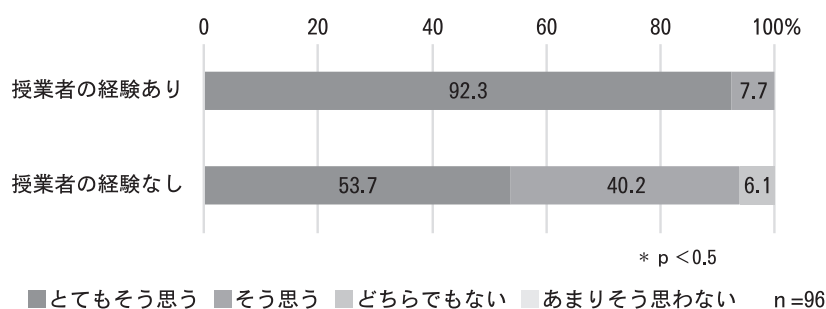


図7 模擬授業での教師役経験による学びの違い1  
(自己課題を見つけ改善しようと思った)

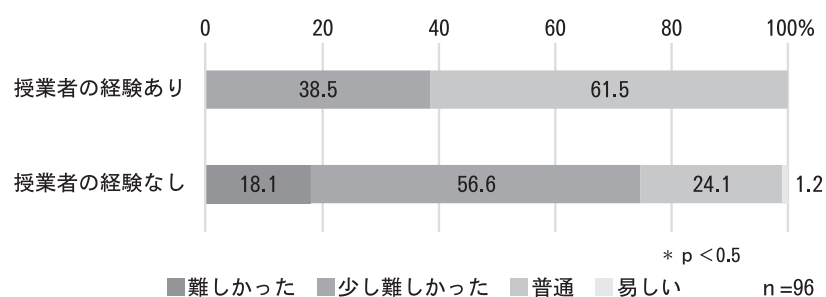


図8 模擬授業での教師役経験による学びの違い2（教材作成）

おける学びに影響することがわかった。ここでいう教材作成とは、授業で用いるワークプリントや視覚教材、掲示用パネル等の作成をいう。授業参観経験のある学生は、小学校で教師の使用する教材を目にしており、教材の良し悪しを評価する視点が無意識に形成されていることが考えられる。そのため、作成したい教材へのイメージも明確に持っており、その理想と現実のギャップが教材作成への難しさに繋がったのではないかと考える。また、教師役の経験の有無による教材作成の困難感の差については、現時点で判断がつかないことから、模擬授業後の学生の自由記述回答を詳細に分析する中で、その要因を探っていきたい。

## 6. おわりに

本稿では、小学校家庭科の模擬授業を実施し、学生の自己評価から模擬授業の学びについて検討した。その結果、グループで実施した模擬授業の取り組みは、問題解決学習の方略によって主体的で対話的な学習活動が行われており、学生の授業への満足度は高いものとなった。これは、現在の学校教育で求められるアクティブラーニングの学習と捉えることができる。一方、指導案や指導計画の作成、学習指導要領の内容把握、教授時の展開方法については、学生の自己評価が低く理解が十分ではないことが明らかになった。さらに、学生の経験差が模擬授業の学びに影響することから、全ての学生に効果のある授業内容の改善を図るとともに、教職課程全体のカリキュラムの見直しも検討する必要があるだろう。

今回は、模擬授業後の学生の学びについて、質問紙調査の結果を数量的にデータ処理し検討を行ったが、個々に生じる学習プロセスや学びの質については検討していない。模擬授業の学習効果について検討するうえで、量的検討と質的検討の両方を行い、学生の学びの特性をより詳細に分析することは重要である。今後の課題としては、設問⑦～⑩の自由記述や模擬授業のフィードバックによる他者評価について質的検討し、小学校家庭科の指導法がより充実するような学習プログラムの構築へと繋げたい。

## 引用・参考文献

- 伊波富久美 (1990)「模擬授業の導入による家庭科教員養成プログラムの改善－教授活動により形成される認知的側面の検討－」長崎大学教育学部教科教育学研究報告 第14巻 pp.163-172
- 伊深祥子 (2018)「協調学習による実践的指導力の育成－家庭科の模擬授業の取り組み－」日本家庭科教育学会誌, 第61巻 第1号 pp.23-31
- 木内剛 (2014)「模擬授業の意義と方法」 柴田義松, 山崎準二編 教育の方法と技術 (第2版) 学文社、東京, pp127-128.
- 白石 晃 (2013)「教員養成教育における模擬授業の取り組み－「保健体育科指導法2」の授業実践から－」天理大学学報, 第233, pp.99-123
- 高木幸子 (2007a)「家庭科教員養成における模擬授業実践を取り入れた教育法プログラムの検討 (第1報)」日本家庭科教育学会誌, 第49巻 第4号 pp.256-267
- 高木幸子 (2007b)「家庭科教員養成における模擬授業実践を取り入れた教育法プログラムの検討 (第2報)」日本家庭科教育学会誌, 第49巻 第4号 pp.268-278
- 野崎健太郎 (2012)「小学校教員養成における模擬授業を導入した「理科指導法」の学習の立案と実践」, 相山女学園教育学部紀要, 第5号 pp.165-175
- 藤田郁郎 (2017)「教材づくりに焦点を当てた体育模擬授業の実施方略に関する事例的検討」 体育研究,